

III 紹 介 III

重村智計『韓国』の品格』

澤 喜司郎

(I)

早稲田大学教授である著者は、韓国の李明博大統領と北朝鮮の金正日総書記の「戦いは今後、激しい対立と、厳しい駆け引きを展開する。戦いは、イ・ミョンバク大統領の任期が終わる2013年まで5年間続く。前途は多難だが、イ・ミョンバク大統領が勝利するだろう、と私は考えている」とし、その理由として「南北の対立が、品格の競争に変わるからだ。これまでは、南北の品格に欠ける指導者たちが、工作と野心、政治的駆け引きを露わにしてきた。それが変わる。前哨戦は、イ・ミョンバク大統領の勝ちであった。彼の次の言葉で、勝敗は決まった。『次の南北首脳会談は、ソウルで行う順番だ。南からは、2回も訪問している』。これは、自分は平壤には行く気がない、という意味になる。南北首脳会談を私利私欲に政治利用しない、という『品格』の宣言である」としている。

また「金大中元大統領から盧武鉉前大統領、日本の山崎拓議員まで、平壤に行きたい下心のある政治家は、北朝鮮に利用される。北朝鮮のいうことを聞き、不利な条件を飲まざるをえなくなる。品格に欠け、野心と欲まみれの政治家ほど、扱いやすい人たちはいない。北朝鮮にかかわった日本の政治家で、尊敬され成功した人は私は知らない」「日韓関係を、利権や個人的利益のために利用しようとする、『品格に欠ける』日本人も少なくない」という。

そして「これからの5年間は、韓国にとって歴史的に最も重要な時期になる。イ・ミョンバク大統領は、『先進化』という目標を掲げた。先進国としての『品格』を目指している。韓国は、日中米露の大国の間で、埋没せずに発展できるか——。民族の存亡がかかっている。21世紀末に、朝鮮民族がアジアでの指導的な地位を確保できるかが、2013年までに決まる。日本では、北朝鮮に関する多様な本が出版される一方で、韓国を理解するための日本人の研究者によるしっかりした本や、テキストになる書籍が少ない。学問的な分析を教える本は極めて少ない。この本では、できる限り理論的な分析も試みたつもりである」としている。

なお、本書の章構成は

第1章 もう媚びない、という『韓国の品格』とは？

第2章 李明博の韓国は、再び『上昇気流』に乗る

第3章 品格のない金大中、人気のない盧武鉉の悲劇

第4章 『MBドクトリン』が金正日を追いつめる

第5章 これを知らなければ、日本は沈没する！

であり、本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

(Ⅱ)

第1章「もう媚びない、という『韓国の品格』とは？」では、李明博氏の大統領選での勝利について「これまで10年間、『財閥罪惡論』を掲げた左翼勢力が政権を維持できたのは、それなりの理由があった。世論は、財閥と保守政権の癒着や、不正・腐敗を厳しく批判した。韓国民は、『清潔で、私心のない指導者』を求めたのだ。ところが、清潔で良心的なはずの左翼勢力にも、癒着や不正がつきまとった。そして、韓国民は、不正・腐敗は左翼政権でも変わらない、との政治の現実は今ようやく気がついた」「韓国の政治は、李王朝時代から『権威主義政治』といわれる。指導者が権威を誇示し、力の政治を行なうからだ。独立後の韓国の指導者も、一人残らず『力の政治』を行なった。ノーベル平和賞を受賞した金大中元大統領でさえ、力による『恐怖政治』を行なった」「国民は、対立と報復の政治に、今回は『ノー』を突きつけた。『対話の政治』と『問題解決能力』を備えた大統領を選択した」という。

そして、李明博大統領は「独立後の4年制大学でまともに学び、卒業した初の大統領で」、「普通の会社員を経験し、普通の価値観と判断力を持った人物が、初めて大統領になったのである。韓国の指導者に、品格が備わったとっていいだろう」「なぜ、4年制大学卒に意味があるのか。これまでの軍人や運動家出身大統領には、大学という最高学府で得られる教養と品格が欠けていた、というしかないからだ。20世紀はもちろん21世紀の教養と知性を欠いていた。何よりも、自由民主主義の意味を理解できなかった」「韓国は、個人情報保護や思想信条の自由、表現の自由、など民主主義の条件は保障されていない。これが左翼政権10年の現実であった」としている。

第2章「李明博の韓国は、再び『上昇気流』に乗る」では、「韓国民は、なぜ李明博大統領を選んだのか。『経済大統領が必要だ』と、考えたからである。それほど

にも韓国経済はよくない。大卒の就職率は、50%弱といわれる。多くの大学卒業生が就職できないでいる。その不満と不安が『経済大統領』の訴えを支持したのだ。「韓国経済は、危険な状況にある。多くの国民が、『韓国経済の危機』を感じている。韓国の経済成長は貿易が支えてきた。その貿易黒字の減少が止まらない」「貿易黒字が減少し続ける最大の原因は、中国への貿易黒字の減少である。韓国製品への魅力が、中国で失われているからだ。中国は輸出企業の発展で、韓国から輸入していた製品の多くを、国内で生産できる実力をつけたのである。また、左翼勢力が労働組合を支援したため、労働争議が多発・長期化した。この結果、国内企業が生産拠点を海外に移転した。また、海外からの投資も減少した」「このため、『雇用なき成長』が、続いている。韓国企業は、労働争議を嫌い労働集約型の産業から撤退し、工場をハイテク化した。労働力を必要としない生産に重点を移した」という。

また「韓国民は、左翼政権の理念とイデオロギー優先の政策では職は生まれず、生活も豊かにならない現実に気がついた」「この結果、北朝鮮を支援する『民族・同胞理念』『反米、反日イデオロギー』では、生活できない現実に目覚めた」「07年の大統領選挙で、保守勢力は63.8%に達する票を獲得したが、これは韓国社会が保守化したからではない。左翼政権では生活はよくなる、と国民が確信したからである」とし、そのため「李明博政権が経済再建と雇用増大に失敗すると、国民の厳しい批判を受けることになる。左翼政権が、再び息を吹き返すかもしれない」と予想している。

(Ⅲ)

第3章「品格のない金大中、人気のない盧武鉉の悲劇」では、「韓国の『社会主義幻想』は、不幸なことに社会主義崩壊後に生まれた。だが、これは歴史の発展段階として、避けられないことだったかもしれない。どの国であれ、歴史の途中経過を飛び越して、次の段階にはいけないからだ。日本でも『社会主義幻想の時代』があった。中国や旧ソ連、北朝鮮を礼賛し、民主化や人権を問題にしない人たちがいた」「金大中元大統領と、盧武鉉前大統領は、韓国の左翼勢力を代表する政治家である。二人とも、貧しい家庭の出身であった。軍人政権と腐敗した保守政治を批判し、政権を獲得した。彼らは、自分たちを弾圧した朴正熙大統領と、それを支えた保守勢力に『報復』した。たまりたまった『怨念』が、政権運営の強い動機であった」と指摘する。

そして、この韓国での社会主義幻想について「80年代、韓国の学生運動家が理論

的なよりどころにしたのは、北朝鮮の『主体思想』であった。韓国人には『主体』という言葉は魅力的である。数千年の歴史の中で、何度となく中国に独立と主体性を侵害された。近代では、日本の植民地にされた。この『歴史の傷み』が、『主体』と『自主』の言葉に魅力を感じさせたのだ。こうして韓国の左翼勢力は、『北朝鮮幻想』にしがみついた。「この時代の学生運動の特徴は、北朝鮮の呼びかけに呼応して『自主独立、反外勢』のスローガンを掲げたことである。『反外勢』のスローガンは、韓国人なら誰もが反対できない意味を持つ。周辺大国に抑圧された歴史が、『自主独立』と『反外勢』の言葉に、心を揺さぶる美しい響きを感じるのだ」という。そして、李明博大統領は「韓国政治につきまとう怨念政治と、古い体質から決別できる指導者で」、「韓国の民主主義をさらに発展させる課題を負わされている」が、「それができれば、韓国はアジアで一番進んだ民主主義国家になるだろう。これこそがイ・ミンバク大統領が目指す『先進化』である。『品格ある韓国』の実現である」としている。

第4章『『MBドクトリン』が金正日を追い詰める』では、「これまでの左翼政権は、核問題の交渉でも北朝鮮側の立場に立ち、アメリカに強く譲歩を求めた。テロ支援国家指定を解除するようにアメリカに強く要求した。しかし、イ・ミョンバク大統領は、対北朝鮮政策では、アメリカと共同歩調をとることを明らかにしている。また、北朝鮮へのテロ支援国家指定解除を、積極的に求めない立場だ。左翼政権は、日本に『早期の日朝国交正常化』を求めた。しかし、イ・ミョンバク政権は『核放棄をしないかぎり北朝鮮への支援はしない』方針である」「これは『太陽政策』の終了宣言である。太陽政策は、金大中政権と盧武鉉政権によって推進された。一言でいえば、『無条件で北朝鮮への支援を行う政策』である」とし、また金大中元大統領と盧武鉉前大統領は「キム・ジョンイル総書記に相当に気を使う政策を、行なってきた。北朝鮮を決して批判せず、一般国民や報道機関にも北朝鮮の『独裁批判』をさせなかった」「韓国では、キム・ジョンイル総書記に対する報道の自由と表現の自由は大幅に規制されていた。というよりも、事実上、言論の自由はなかった。言論の自由の保障されない国家は民主主義ではない」という。

そして「金大中大統領と盧武鉉大統領は、南北首脳会談をキム・ジョンイル総書記に懸命に呼びかけ、ようやく『実現してもらった』のだ。このため、巨額の資金を送金し、膨大な支援を約束した」「この結果、韓国の政治家はキム・ジョンイル総書記にはっきりモノをいえなくなった。事実上の『僕』か『奴隷』状態というしかない」「これは、韓国の政治家と政治が、キム・ジョンイル総書記の『人質』状

態にあったことを、意味する。この人質状態から脱するには、南北首脳会談を『無条件で求めない』ことである。だからイ・ミョンバク大統領は、南北首脳会談を行なうなら次回は韓国で行なうとの『条件』をつけ、「北朝鮮と対等な国家関係を確立し、南北問題を外交で解決したいと考えている」が、「イ・ミョンバク大統領の対北朝鮮政策の行方は、決して楽観できない」としている。

(Ⅳ)

第5章「これを知らなければ、日本は沈没する！」では、「イ・ミョンバク大統領は、米韓同盟の強化を目指している。これは、『民族優先』の盧武鉉政権から、『同盟優先』への回帰である。韓国とアメリカの関係は、金大中政権で悪化し、ノ・ムヒョン政権では最悪の状態になった。ノ・ムヒョン政権は、『民族優先』を掲げ、北朝鮮に傾斜し、一時は在韓米軍撤退も求めた。このため、アメリカはノ・ムヒョン政権を『親北反米政権』と見ていた。在韓米軍撤退は、北朝鮮が昔から強く求めていた。在韓米軍が撤退すれば、軍事統一も可能になる、というのが北朝鮮の判断だった。アメリカ国防総省には、ノ・ムヒョン大統領の要求は、この北朝鮮の政策を代弁しているように見えた」「イ・ミョンバク大統領は、この反米路線から同盟重視へ、政策の転換を明らかにしている。イ・ミョンバク大統領は、大量破壊兵器の拡散に対する安全保障構想(PSI)に正式に参加する意向だ」し、「2012年4月にアメリカ軍から返還予定の、『戦時における韓国軍の作戦指揮権』についても、返還の時期を延期する意向だともいわれる」という。

そして「左翼政権時代に、韓国の世論は米韓同盟の解消を志向した。この根底にあったのは、北朝鮮に対する政策の変化である。韓国民は、左翼政権時代は、北朝鮮を『脅威』とは感じていなかった」「同盟を維持する最大の要素は『共通の価値観』と『共通の敵』である。この二つの要素が失われると、同盟は危機に直面する。左翼政権時代の米韓両国は、共通の価値観と共通の敵を失った。だから、同盟の維持は極めて難しい状況になってしまった」と指摘している。

他方「イ・ミョクバク大統領は、日本との関係について、『歴史問題』のような後ろ向きの問題には関心がない、と明らかにした。『日本の歴史責任を問うつもりはない』と述べた。『未来志向で問題に取り組む』と強調している」「この判断の背後には、日本の協力なしには経済再建と雇用の拡大は難しい、との現実的な判断がある」「李明博大統領は、日本との関係について『過去の歴史問題について日本の責任を追及したり、反省を求めることはしない』と明言した。これは『未来志向』

を柱に、日韓関係を立て直そうとする意向を示したものだ」「実利主義者のイ・ミョンバク大統領の登場は、日韓関係を進展させる好機である。日本は、積極的に協力すべきだ。日本は、韓国が提唱する東アジア共同体の実現にも、協力すべきである」と結んでいる。

(V)

本書には日韓史についての誤った記述も一部にみられ、また「07年の大統領選挙で、保守勢力は63.8%に達する票を獲得したが、これは韓国社会が保守化したからではない」とする一方で、「07年大統領選挙の結果は…意識が3年間に大きく変革し、保守化したことを物語っている」とし、同様に「大卒の就職率は、50%弱といわれる。多くの大学卒業生が就職できないでいる。その不満と不安が『経済大統領』の訴えを支持した」とする一方で、北朝鮮の「核実験などの影響で『親北反米』から『親米反北』に世論が大きく変わった。この意識の変化が李明博大統領を生み出した」とするなど、主張に一貫性がなく矛盾するところもみられる。さらに、大統領の名前を漢字で書いたり、カタカナで書いたりと非常に読み難い。

他方で、著者の新聞記者時代の自慢話が随所にみられ、興を醒まされるが、李明博大統領と新しく生まれ変わろうとしている現在の韓国を知るには手頃な一冊かもしれない。

以上、本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが、浅学非才な筆者には的確な紹介ができず、また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり、この点については著者のご海容をお願いする次第である。

(三笠書房, 2008年5月, 251頁, 定価1,500円+税)